

第 2 8 回

西洋社会科学古典資料講習会

2008年11月11日～14日

一橋大学社会科学古典資料センター

講 義 日 程

第1日 11月11日(火)

9:10～9:30 オリエンテーション

- | | | |
|---------------|--|------------------------------------|
| ① 9:40～11:30 | 書誌学 (I)
18 世紀イングランドの民衆向け出版物を
読む | 佐藤 和哉
日本女子大学文学部准教授 |
| ② 13:00～14:50 | 書誌学 (II)
古版本の目録作成について
—17 世紀エルゼビア刊本を通じて— | 床井 啓太郎
一橋大学社会科学古典
資料センター専門助手 |
| ③ 15:10～17:00 | 保存・修復 (I)
紙資料の保存 | 増田 勝彦
昭和女子大学大学院
生活機構研究科教授 |

懇親会 (17:15～19:00) : 希望者のみ

第2日 11月12日(水)

附属図書館見学 (9:00～9:30) : 希望者のみ

- | | | |
|---------------|--|----------------------|
| ① 9:40～11:30 | 古典研究 (I)
一橋大学社会科学古典資料センター
所蔵資料から見るイギリス経済学の潮流について | 木村 雄一
埼玉大学教育学部准教授 |
| ② 13:00～14:50 | 保存・修復 (II)
書籍の修理と保存の技術 | 岡本 幸治
製本家 |
| ③ 15:10～17:00 | 社会科学古典資料センター見学 (書庫・所蔵資料・貴重書保存修復工房) | |

第3日 11月13日(木)

- | | | |
|---------------|---------------------------------|-----------------------------|
| ① 9:40～11:30 | 書誌学(Ⅲ) | 武者小路 信和 |
| ② 13:00～14:50 | 記述書誌を"読む"面白さ
—図書館員のための書誌学入門— | 大東文化大学文学部准教授 |
| ③ 15:10～17:00 | 古典研究(Ⅱ)
オーストリア哲学と世紀末思想 | 嶋崎 隆
一橋大学大学院
社会学研究科教授 |

第4日 11月14日(金)

- | | | |
|---------------|---|---------------------------------|
| ① 9:40～11:30 | 書誌学(Ⅳ)
フランス17世紀における書物をめぐる状況 | 野呂 康
成城大学非常勤講師 |
| ② 13:00～14:50 | 古典研究(Ⅲ)
モンテスキュー『法の精神』(1748)と
その読者たち | 山崎 耕一
一橋大学社会科学
古典資料センター教授 |
| ③ 15:00～15:30 | 修了式 | |

1. 目的

この講義では、初期近代イングランドの民衆向け出版物を整理するうえで必要とされる書誌的なことがらについてお話したいと思います。この時代の出版物、とくに中小の印刷出版業者が出したものは、タイトルページなどから書誌情報を引き出す方法の点で、現代の出版物と異なる点があります。また、この時代の出版物一般の特徴として、活字や言葉の点でも現代の英語の出版物と異なります。これらについての最小限の知識を、実習を交えながら講義していきます。あわせて、18 世紀の英語出版物について、電子媒体で手に入る情報について、検索のしかたや検索によって得られたデータの扱いかたなどについてもお話しします。

2. 資料

本講義でおもに扱う史料とその呼称について簡単に述べておきます。主として 17、18 世紀のイギリスやアメリカ植民地において、粗末な装丁と紙質で印刷され、板目木版のブロックによる挿絵を含んだ薄い小冊子（通常 8〜32 ページ）が廉価に販売されていました。このような冊子は、19 世紀の 20 年代には書誌学者や古書蒐集家によって「チャップブック（chapbook）」と呼ばれました。ロンドンなどの大都市やニューカッスルなどの地方の拠点となる都市では印刷出版業者の店や本屋で売られていましたが、郡部では行商人によって売り歩かれ、初期近代の英語圏では広く人口に膾炙しました。当時の出版カタログでは、このような冊子類は「一ペニー物語集 [ペニー・ヒストリーズ]」あるいは単に「物語集 [ヒストリーズ]」、場合によっては「愉快な本 [メリー・ブックス]」と呼ばれていました。内容は多岐にわたり、なかには『ロビン・フッド』のように、中世からヒストリーズを経て現代にまでその物語の枠が継承されているものもありますが、多くは近代には見られなくなる物語です。巨人退治などのヒーローもの、笑話、メロドラマ、悪人が既成の秩序を壊しながら旅をするもの、徒弟が主人公のものなどの物語が多いのですが、それ以外にも、民間医療、まじないや占いの本もありました。「チャップブック」という言葉が使われるようになる 19 世紀の 20 年代くらいを境に、このような「物語集」はあまり出版されなくなっていくます。粗末な装丁・紙質で廉価に販売される小冊子群は依然として存在していましたが、18 世紀までの「物語集」とは大きく異なったものとなっていきます。例えば、「物語集」が想定していた読者のなかにも子どもが含まれてはいたものの、必ずしも子どものみを対象としたものではなかったのに対し、19 世紀になって出される小冊子群は、タイトルからも内容からも明示的に子どもだけを読者の対象とするようになります。それに伴って、版型も子どもの手に合わせてずっと小さくなります。「物語集」の多くが大体縦 15 センチ、横 9 センチくらいなのに対し、19 世紀の子ども向け小冊子は縦 10 センチ、横 6.5 センチくらいです。内容の点でも、いわゆるおとぎ話や子どものための唄のほか、アルファベットを覚えさせたり知識や宗教の教を説いたりするものがメインとなっていきます。このように、19 世紀の子ども向け小冊子群と「物語集」には多くの共通点があるとは言えるものの、内容や読者層について議論する場合には、別のものとして扱う必要がありますので、この講義ではなるべく「チャップブック」という用語を避け、「ヒストリーズ」とします。

現在、私たちがこれらを資料として扱うときに問題となるのは、これらには事実上著作権がなく、同じタイトルが使い回されていたこと、また、明確な書誌情報がタイトルページに与えられている場合がほとんどないために、出版社や出版時期についての特定がきわめて困難なことが挙げられます。これらをどうやって推定するか、については後ほど述べます。

このような資料が、「西洋社会科学古典」とどう関わるかについては、異論のあるところもあるかと思いますが、私自身は、社会学が現代の大衆文化を研究して、そこから大衆の価値意識の分析を行うことができるように、当時の民衆の価値意識を析出する一つのツールとして、「ヒストリーズ」のような資料が活用できるのではないかと考えています。

3. 資料に即して

(1) フォント・正字法など

民衆向け出版物に限りませんが、18 世紀の出版物は、英語の書きかた（大文字、小文字の使いかた）や綴り、活字（とくに小文字の s）などの点で現代の英語と異なります。とくに 17 世紀以前これはおおむね慣れの問題なのですが、最小限のことは知っておいたほうが楽です。実物を示しながら、一緒に読んでみたいと思っています。対処法について、念のため、OED という辞書について授業ではご説明する予定です。さらに、「異時同図法」で書かれた挿絵についても実例を見ておきましょう（*Tom Tram of the West* を参照の予定）。

(2) 出版情報について

18 世紀イングランドの出版物につけられる出版情報のもっとも整った形は「X によって Y のために出版され、Z によって販売される（Printed by X for Y and Sold by Z）」というものであり、この場合 X が印刷出版業者で Y が著作権の保有者、Z が卸・販売業者です。多くの場合は印刷出版業者を省いて「Y のために Z によって販売される」とされますが、もし著作権保有者と卸・販売業者が同じであれば「Y のために出版される」か「印刷・販売は Y による」などのようになります。これらのどの場合でも省かれることがない重要な情報として残されるのは、通常であれば卸・販売業者の名前です。ところが、ヒストリーズには、たとえあったとしても、この卸・販売業者の名がなくて、「一によって出版される」としか書かれていないものがきわめて多く見られます。そのような出版情報は販売に関する取り決めについて何も記していないことになるわけですが、それはヒストリーズにそのような取り決めが存在しないことを意味します。このあたりも実例にあたりながら検討します。

(3) 出版者、出版時期の特定について

ヒストリーズには、このような簡略化された出版情報でさえつけられていないことも多く、その場合の出版者や出版時期の特定はきわめて困難です。まったく分からないことも確かにあります。しかし、乏しい情報からでも、ある程度の範囲内での時期の特定は必ずしも不可能ではありません。まず、「ロンドン、オルダマリー・チャーチャードにて出版、販売」などの具体的な出版地が記されている場合です。通常、出版地の記載は都市のみですが、出版者の名前かわりに街区の名前が記されていることも多く、この場合には、プローマーという研究者の編纂した『イギリス印刷・出版業者事典-1726 年～1775 年』などを使って印刷出版業者を特定し、その活動時期から印刷物の出版年代を推定することになります。また、ヒストリーズには当時のメインストリームの文学作品のダイジェストも見られるので、そのオリジナルの作品の出版年代も一つの手がかりになります。

4. 電子資料について

ヒストリーズに関わるいくつかの電子媒体による書誌も見ておきたいと思います。ここでは扱う予定の媒体の紹介にとどめておきます。

(1) ESTC (The Eighteenth-Century Short Title Catalogue) (CD-ROM)

(2) The Eighteenth Century (マイクロフィルム)

(3) ECCO (Eighteenth Century Catalogue Online) (ウェブカタログ)

5. 参考文献

Ashton, John. *Chap-books of the Eighteenth Century*. 1882.

Feather, John. *The Provincial Book Trade in Eighteenth-century England*. Cambridge: Cambridge UP, 1985)

Mandrou, Robert. *De la culture populaire aux 17^e et 18^e siècles*. Paris: Editions Stock, 1975. (ロベール・マンドルー、二宮宏之・長谷川輝夫訳『民衆本の世界-17・18 世紀フランスの民衆文化』京都：人文書院、1988 年)

- Neuburg, V. E. 'The Diceys and the chapbook trade.' *The Library* 5th ser. 24 (1969), 219-31.
- . *Popular Literature: a history and guide*. Harmondsworth: Penguin Books, 1977.
- Plomer, H. R., Bushnell, G. H., and E.R.MacC. Dix (eds). *A Dictionary of the Printers and Booksellers Who Were at Work in England, Scotland, and Ireland from 1726 to 1775*. London: Bibliographical Society, 1932.
- Simons, John, ed. *Guy of Warwick and Other Chapbook Romances: Six Tales from the Popular Literature of Pre-Industrial England*. Exeter: University of Exeter Press, 1998.
- Spufford, Margaret. *Small Books and Pleasant Histories: Popular Fiction and its Readership in Seventeenth-Century England*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1981.

古版本の目録作成 —17 世紀エルゼビア刊本を通じて—

床井 啓太郎（社会科学古典資料センター）

1. はじめに

オランダにエルゼビアという出版社があります。ご存知のように、世界でも最も大きい学術出版社の一つにして、ScienceDirect などの巨大なプラットフォームを通じて現代の学術コミュニケーションを牽引する、いわば最先端の企業の一つです。では、かつてオランダに同じエルゼビアの名を冠する印刷・出版工房があったことはご存知でしょうか。

この「古い」エルゼビアは、16 世紀から 18 世紀にかけて、オランダのライデンやアムステルダムなどに工房を構えて活動し、約 130 年の間に 2000 以上のタイトルを出版しました。彼らの出版物のなかには、エラスムスが校訂を行ったギリシア語版新約聖書など、重要な著作物がいくつも含まれています。

この講義では、前半部分で、エルゼビアが 17 世紀に刊行した出版物を題材に、古版本の目録作成についてお話しし、後半は、現在まで受け継がれているエルゼビアの特徴的なプリンターズ・デバイスを通して、古い歴史をもつこの出版社の活動に触れてみたいと思います。

2. 目録作成

古典資料センターで古版本の目録作成時に使用している目録規則類

- ・『英米目録規則（第 2 版日本語版）』（AACR2）東京，日本図書館協会，1982.
- ・『稀覯書の書誌記述』国立，一橋大学社会科学古典資料センター，1986。（一橋大学社会科学古典資料センター Study Series, no. 11）
- ・『目録システムコーディングマニュアル』東京，国立情報学研究所.
- ・Anglo-American cataloging rules. 2nd ed., 1998 revision. Chicago, American Library Association, 1998.
- ・Descriptive cataloging of rare books. 2nd ed. Washington, D.C., Library of Congress, 1991.

古典資料センター所蔵の I. A. Comenii *lanua aurea reserata quatuor linguarum ...* . Lugd. Batav., Ex officina Elseviriorum, 1640. 【貴 A:3929】（図表 1,2）を題材に、古版本目録作成時の注意点を考えます。

古版本の目録作成でも、注意すべき点は一般書と大きく変わりはありません。①情報源から必要な情報を正確に読み取り、②読みとった情報をもとに正しく書誌の同定を行い、③適用する目録規則に基づいて正確に目録の記述を行う、という基本的な作業が常に重要

です。ただ、古版本の場合、この一連の流れがスムーズに進むことを妨げる要素がそこかしこにありますので、こういった点が支障となるかを知っておくことは、目録作成の一助となるかもしれません。以下、課題資料に沿って、注意すべきポイントをフィールドごとに挙げていきます。

<TR>

- ・多くの場合、レイアウトから一見してタイトル、著者名を見て取ることができる現代の出版物と異なり、古版本では、しばしば多くの情報が切れ目なく連続してタイトルページに並べられた。また、課題資料のように「著者～の…」などの形で、タイトル内に著者名が組み込まれる形式も多く見られた。

*l.1 “I. A. Comenii”=「コメニウスの」：書名に掛けて著者名を表している。

→属格で掛っている場合タイトルと分離できない。

*l.13 “a Nathanaele Dhuez ...traducta”「ナタナエル・デュエスによって...翻訳された」の部分が責任表示

- ・ロング s と f を間違わないように気を付ける。横棒が右に突き抜けているのが f。

*l.6 “Compendiofa”× “Compendiosa”○

- ・“I / J”、“U / V / W”の転記に注意する。（『稀観書の書誌記述』0H.）

*l.2 “lanva avrea” → “lanua aurea”

<PUB>

- ・Lugd. Batav. = Lugdunum Batauorum = Leiden

出版地は表示のとおり記述し、[Leiden]を付記。（AACR2 1.4C1,2.）

- ・ローマ数字の表記：M=1000, CIO=1000, D=500, IO=500, C=100, L=50, X=10, V=5

*CIO IO C X L=1640

- ・『稀観書の書誌記述』に基づいて書誌記述を行う場合、AACR2の規定と異なることがあるので注意。

*出版地名の前の前置詞はそのまま転記する（『稀観書の書誌記述』4B2.）

付随している前置詞を省略してそのまま記載する（AACR2 1.4B4.）

<PHYS>

- ・1800年以前の出版物については、版型を決定できるときは必ずそれを付記する。（『稀観書の書誌記述』5D1.） *(8vo)=8折版

<VT>

- ・<TR>の記述は、“I / J”、“U / V / W”の転記により資料の表示形と異なるため、VT:TTに転記する前の表示形をそのまま記述し、アクセスポイントを作成する。

<NOTE>

- ・注記には、本文の形式（課題資料はラテン語、ドイツ語、フランス語、イタリア語のコラム）、ページ付けの誤り、ビネットについてなどが記述されている。

3. プリンターズ・デバイスの比較 —"Solitaire"から"Minerva"へ—

例題に挙げた資料のプリンターズ・デバイスには、蔓の絡んだ樹木とその横に佇む人物、ラテン語のモットーが入った旗が描かれています。実はこの有名なエルゼビアのプリンターズ・デバイスには、いくつかのバリエーションが存在します。古典資料センターの所蔵資料を調べてみると、エルゼビアから出版された資料は登録済みのもので 68 点あり、そのうちプリンターズ・デバイスのあるものは 24 点、さらに樹木と人物のモチーフのものは 19 点ありました。19 点のうち図柄の重複するものを除くと、全部で 7 種類の「樹木と人物」が残ります。(図表 3 枠内)

この 7 枚は、一見すると同じ図柄の別のバージョンのように見えますが、よく見ると大きく 2 つのタイプに分かれることがわかります。図表 3 の上の 4 枚では、樹木には蔓が絡まり、横に佇む人物は老人のようですが、下の 4 枚には蔓はなく、老人は、戦いの装束に身を包んだ女性に替わっています。また、図の左には小さな鳥が追加され、旗に書かれたモットーも別のものに替わっており、さらに中央の樹木の枝振りも少し異なるようです。

プリンターズ・デバイスの研究者の間では、上の 4 枚は"Solitaire"、下の 4 枚は"Minerva"と呼ばれているものですが、それぞれの図柄はどういった意味を含んでいるのでしょうか。講義のなかで具体的に考察していきたいと思います。

4. Elzevir と Elsevier

近世の印刷・出版業者としてのエルゼビアは、1580 年にライデンでロデヴァイク・エルゼフィアによって設立された工房がその始まりです。印刷出版業は、エルゼビアが創立された当時から、過当競争を勝ち抜かなくてはならないリスクの大きいビジネスでしたが、エルゼビアはオランダで設立されたばかりの大学(1575 年にオランダ最初の大学としてライデン大学が設立されている)と関係を深めることによって、徐々にその地位を高めていきました。ロデヴァイクは、1583 年にエルゼビアとして初めて書籍を出版したのを皮切りに、1617 年に亡くなるまで 120 以上のタイトルを出版しています。



現在エルゼビア社で使用されている
ロゴマーク

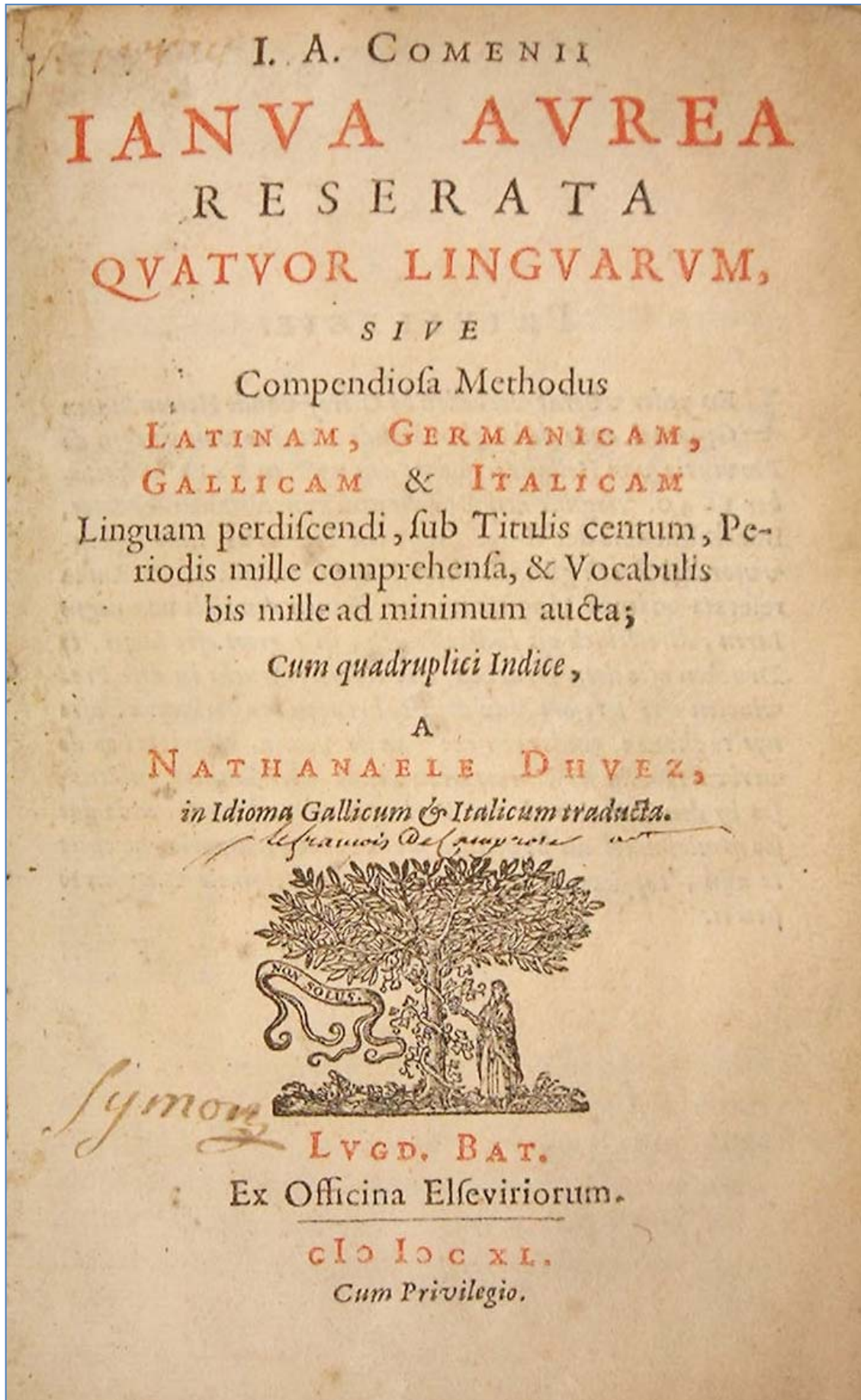
ロデヴァイクの死後、エルゼビアの経営はその子孫たちが受け継ぎました。エルゼビアの出版物には、出版者として単に"Ex officina Elseviriorum"や"Apud Elzevirios"とだけ記されているものの他に、子や孫たちの名を冠した表示も様々な種類や組み合わせが見受けられ、多くの子孫がエルゼビアの事業に関わったことがわかります。注意すべきなのは、こうした組み合わせや工房の所在地の変化が、代替わりによってのみ進んだのではないこと、すなわち、同時期に Elzevir の名前で活動する工房が並行して別の場所に存在することもあったし、発行人の組み合わせが移籍などで生前に変わることもあったということです。こうした変化や所在地の違いは、プリンターズ・デバイスからもある程度読み取ることがで

きます。

エルゼビアの活動は、1712 年、ロデヴァイクの玄孫に当たるアブラハムの死とともに停止します。次にエルゼビアの名が世に現れるのは、ヤコブス・ロベルスという人物がロッテルダムで新しく出版社を設立した 1880 年のことでした。この出版社は輝かしい歴史をもつ Elzevir にちなんで Elsevier と名付けられ、彼らのプリンターズ・デバイスもそのまま受け継がれました。

参考文献

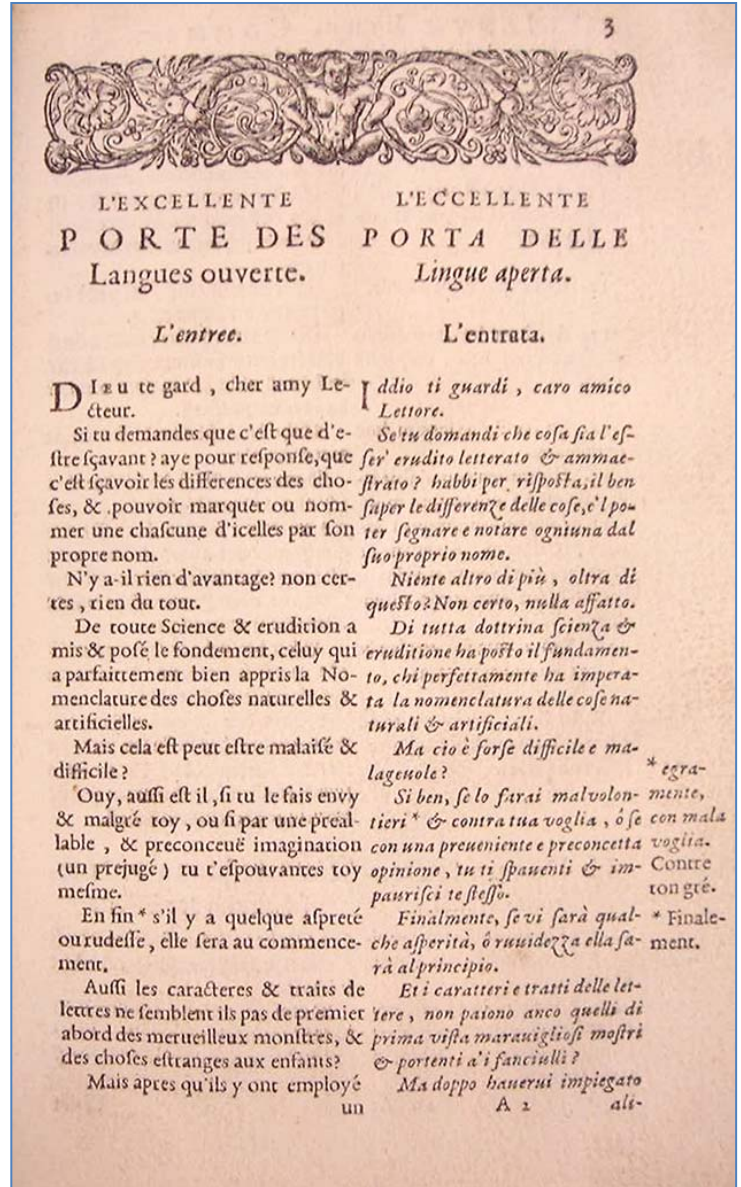
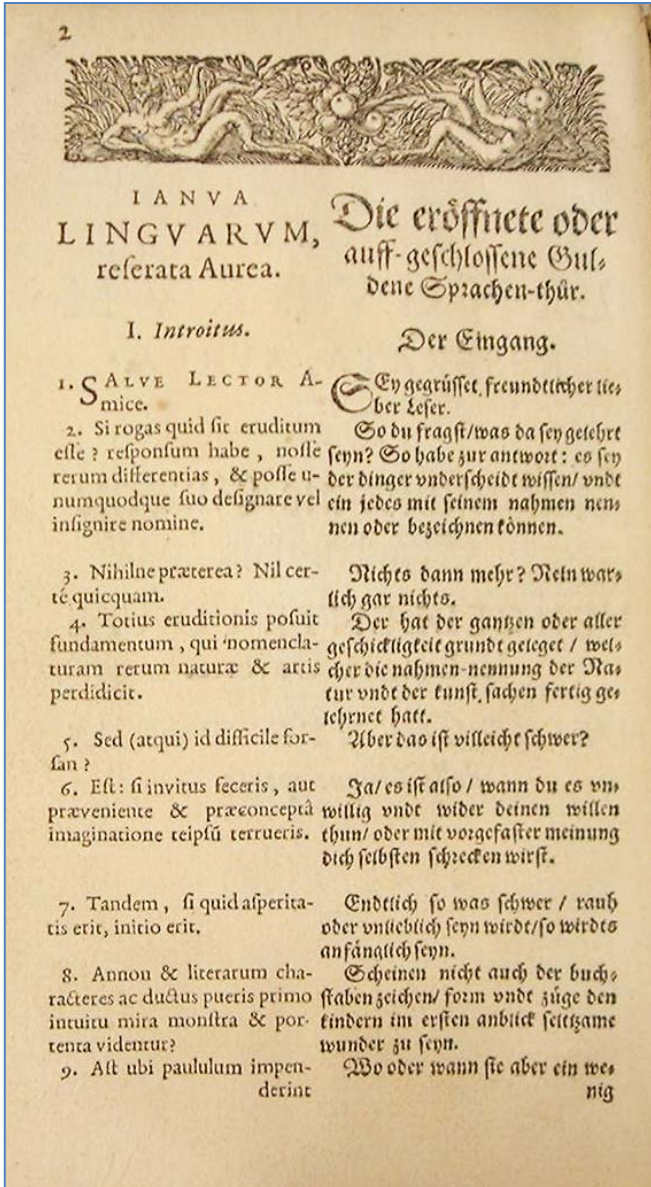
- ・『ギリシア・ラテン引用語辞典（新增補版）』東京、岩波書店、1963.
- ・ Willems, A. Les Elzevier : histoire et annales typographiques. Nieuwkoop, de Graaf, 1991.
- ・ Goldsmid, E. Bibliotheca curiosa : a complete catalogue of all the publications of the Elzevier Presses, Hidesheim, G. Olms, 1976.
- ・ Rahir, E. Catalogue d'une collection unique de volumes imprimés par les Elzevier et divers typographes hollandais du XVIIe siècle, Paris, Damascène Morgand, libraire de la société des bibliophiles Français, 1896.
- ・ Miller, C.W.E. Ne extra oleas. The American Journal of Philology. 1914, vol. 35, no. 4, pp. 456-462.



I. A. Comenii Ianua aurea reserata quatuor linguarum ...

Lugd. Batav., Ex officina Elseviriorum, 1640.

【貴 A:3929】



I. A. Comenii IANVA aurea reserata quatuor linguarum ...
Lugd. Batav., Ex officina Elseviriorum, 1640.
【貴 A:3929】 p.2, 3



The original mark of Isaac Elzevir used for the first time in Leyden in 1620.



I. A. Comenii Ianua aurea reserata quatuor linguarum
Lugd. Batav., Ex officina Elzeviriorum, 1640.
【貴 A:3929】



Ioh. Cloppenburgi De fœnore et usuris
Lugd. Batav., Ex officina Elzeviriorum, 1640.
【貴 B:151】



Salmasio, C. De modo usurarum liber.
Lugd. Batav., Ex officina Elzeviriorum, 1639.
【Menger:Lat:314】



Renati Des Cartes Meditationes de prima philosophia... .
Amstelodami, Apud Ludovicum Elzevirium, 1650.
【貴 A:3604】



Philippi Cæsii à Zesen Leo Belgicus... .
Amstelædami, Apud Ludovicum & Daniele Elzevirios, 1660.
【Menger:Lat:409】



Antoni Perez I.C., S.C. & R. Majestatis consiliarii... .
Amstelodami, Apud Ludovicum & Daniele Elzevirios, 1657.
【Menger:Lat:279】



Ioan. Baptistæ Veri Rerum Venetarum libri quatuor... .
Amstelodami, Apud Ludovicum Elzevirium, 1644.
【Menger:Lat:464】

紙資料の保存

増田勝彦

目 次

- 1.紙自身に内在する劣化要因
- 2.環境に依存する劣化要因
- 3.劣化予防対策の考え方と実施

1.紙自身に内在する劣化要因

紙自体および紙中に存在する物質、酵素によって生起する自己分解

1-1.碎木パルプ紙

リグニンの変色物質の転移

(本紙だけではなく周囲が茶褐色になる)

＜対策＞→包装用紙製品は中性紙とする(袋、包装紙、箱の紙、板紙)

1-2.酸性サイジング処理紙

1-2-1.酸性物質(明礬(カミ)、硫酸アルミニウムなど)

①セルロースを加水分解し、結晶化を促す

②紙への添加物として

②-1 明礬

: 中国の表具師は糊に明礬を入れる(明時代の書籍の劣化)

*芥子園画伝(1701): 絹の場合 膠 1.5%、明礬 0.6%

: 日本画家は、膠に明礬を混ぜてドーサとし、紙に塗布する

*狩野派の法: 紙の場合 膠 2.1%、明礬 1%

*本間良助「日本画を描く人のための秘伝集」昭和8年5月、厚生閣書店

: 西洋の15-16世紀の紙でも明礬は膠と共に使われていた

*マイエンスの手記(1631):

紙に水3ガロン、膠1ポンド、明礬2.5ポンド(水に対して膠3.3%、明礬8.3%)

*森田恒之「画材の博物誌」昭和61年6月、中央公論美術出版

②-2 硫酸アルミニウム

: 木材パルプ紙のしみ止め用ロジンの繊維への定着剤として添加される

＜対策＞→アルカリ性物質による中和と緩衝性物質の残留処置

炭酸カルシウム(CaCO_3)、重炭酸マグネシウム(MgHCO_3)

但し、添加濃度が低い場合は、劣化速度は遅い。

→「和紙の劣化に対する明礬の影響」古文化財の科学 32,pp78-75

→「白色顔料による紙の劣化抑制」古文化財の科学 32,pp70-77

1-2-2.触媒(金属イオン)

①酸化反応を促進する(インクに含まれる鉄、付着した錆、顔料の緑青)

②黄土に含まれる鉄は損傷を与えない

＜対策＞→酸性を緩和する処置

1-3.保存・修復材料

①セロテープ類による汚損・変形

＜対策＞→有機溶剤による除去

②漂白剤(漂白中、残留漂白剤による)

＜対策＞→外観の向上を図るだけの漂白を避ける

→見難い文字を見易くさせるときのみ行なう

→修復家と討議

2.環境に依存する劣化要因

2-1.生物環境

虫害とカビ害（温度、湿度が高いと発生しやすい）

2-1-1.虫害

＜対策＞燻蒸、I P M *補足-2 を参照

2-1-2.黴害

（黴の生育範囲）

①褐色斑点（フォクシング）→乾性の黴

②黒色・赤色・青色の黴→湿性の黴

＜対策＞→保存環境の制御、集中豪雨・配管事故による漏水

→普通の条件では、風通しを確保すれば過度の湿度は避けられる

→防水性の箱の中に一度水気が入ると乾燥し難くなる傾向がある

2-2.生物以外の環境

2-2-1.温度と湿度

①温度と湿度が高いと、化学反応速度が増す

②含水率が低いと紙は硬くなり、折曲げに弱くなる（過乾燥）

③温度湿度の変化による紙の伸縮

④温度湿度の変化が急激な場合の本などの変形

＜対策＞→書庫・収蔵庫の温度湿度管理

設計による省エネ型収蔵庫、

温度湿度調節機器の設置、特に除湿器の設置

→木や紙、土壁や漆喰壁も湿度調整機能を持つ

2-2-2.汚染空気

a) 環境大気中の酸素・酸化硫黄・酸化窒素・水分等外部からの物質による化学的作用

汚染大気から→ 亜硫酸ガス（ SO_2 ） 硫酸になる可能性

窒素酸化物（ NOX ） 硝酸になる可能性

オゾン、酸素など

＜対策＞→アルカリ性物質による中和と緩衝性物質の残留処置

炭酸カルシウム（ CaCO_3 ）、重炭酸マグネシウム（ MgHCO_3 ）

→アルカリ性物質を含む紙で包む

*補足-1 を参照

＜対策＞→収納箱によるシェルター カイルラッパー

→「容器に入れる一紙資料のための保存技術」、図書館協会

b) 環境材料から放出される物質による

b-1.新しい木材から放出される樹脂→桧などの箱に保存された金属の表面に樹脂

が付着し、錆を進行。紙にも、フォクシング状褐色斑点をつくる。

＜対策＞→内装木材の場合は、ハترون紙などの被覆でも樹脂吸着に効果

樹脂の少ない材を使用する（桐、杉の白太など）

b-2.アルカリ性物質

①染料を変色させる→浮世絵

②写真の乳剤に影響

③絹を劣化させる

④アマニ油（油絵の溶き油）硬化膜を褐色化。

打ち立てコンクリートから放出されるアルカリ性物質など

＜対策＞→コンクリートの枯らしに時間掛ける、除湿機の連続運転、包装用紙で壁面を覆う

アルカリ性が極めて高い紙（残留木灰を多く含む和紙）に包む危険性

＜対策＞→中性の紙に包む

2-2-3.紫外線その他の光

a) 光（一般的には、照明が明るいと温度も上がる。）

①可視光線、紫外線 日に曝された紙が変色する（白くなる、茶褐色になる）

＜対策＞→紫外線除去フィルターの使用

→ 光量の制限 暗ければ長時間、明るければ短時間

$50\text{Lux} \times 8\text{hrs} \times 200\text{日} = 100\text{Lux} \times 8\text{hrs} \times 100\text{日} = 80,000\text{Lux}/\text{年}$

（ギャリー・トムソン著、「博物館の環境管理」に記されている例）

博物館・美術館における展示照明の推奨照度（村上隆「文化財のための保存科学入門」）

資料	ICOM（1977）推奨値	IESNA（1987）推奨値	照明学会（1999）推奨値
光に非常に敏感な資料（1）	50lx できれば低い方がよい（色温度約 900K）	50lx	50lx （1日8時間、年300日で 積算照度 120,000lx/h）
光に比較的敏感な資料（2）	150～180lx （色温度約 4,000K）	75lx （1日8時間、年300日で 積算照度 180,000lx/h）	150lx （1日8時間、年300日で 積算照度 360,000lx/h）
光に敏感ではない資料（3）	特に制限なし ただし 300lx を超えた 照明を行う必要はほとんどない （色温度約 4,000 ～ 6,500K）	特に制限なし 実際には展示照明効果と 輻射熱を考慮する必要あり	500lx

ICOM：国際博物館会議 IESNA：北米照明学会

（1）染織品・衣装・死体・ストリー・水彩画・日本画・素描・手写本・切手・印刷物・壁紙・

染色した皮革製品・自然史関係標本

（2）油彩画・テンペラ画・フレスコ画・皮革製品・骨角・象牙・木製品・漆器

（3）金属・ガラス・陶磁器・宝石・エナメル・ステンドグラス

lx：ルクス、照度 K：ケルビン、絶対温度

2-2-4.用途に応じた加工・使用による汚染、変質、疲労破壊

①書の縦位置保管、取扱による表面の擦れ・ページの破れ

＜対策＞→現状では、収納箱、帙、ラッパーで保管

注意深く丁寧な取扱

②閲覧による紙の疲労

＜対策＞→調査・研究時だけの保護策

2-2-5.災害

①水害（水害を受ける可能性は予想以上に高い）

*火災時の消化水、

*台風・集中豪雨時に浸水だけでなく壁・天井からの水漏れ

*配管の故障による水漏れは意外な場所が被害を受ける

＜対策＞→水を被った文書は、まずポリ袋に入れて出来るだけ小分けにし、

急速に凍結乾燥させる（凍結乾燥装置）
一度に処理できる量をあらかじめ調べておく
→急速凍結のほうがよいが、なければ家庭用冷凍庫でもよい。
その時には、利用できる冷凍庫の存在を確認しておく。家庭用冷凍庫を使用する時は解凍後吸い取り紙で徐々に乾燥させる

2-3.収蔵用材

2-3-1.碎木パルプ紙に含まれるリグニンの変色と変色物質の転移

（本紙だけではなく周囲が茶褐色になる）

＜対策＞→包装用紙製品は中性紙とする（袋、包装紙、箱の紙、板紙）

2-3-2.新しい木材から放出される樹脂→桧などの箱に保存された金属の表面に樹脂が付着し、錆を進行。紙にも、フォクシング状褐色斑点をつくる。

＜対策＞→内装木材の場合は、ハトロ紙などの被覆でも樹脂吸着に効果
樹脂の少ない材を使用する（桐、杉の白太など）

2-3-3.アルカリ性が極めて高い紙（残留木灰を多く含む和紙）に包む危険性

＜対策＞→中性の紙に包む

3.劣化予防対策の考え方と実施

「繊維の寿命」「紙の寿命」と「紙を素材とした文化財の寿命」

修復の考え方

損傷を受けた原因は除去できるか。

本来の姿、装丁を尊重しているか。

乱暴な取扱にも耐える強さまで修復する必要があるか。

図書館・文書館における環境管理（シリーズ本を残す8）稲葉政満著 2001.5

IFLA 図書館資料の予防的保存対策の原則（シリーズ本を残す9）エドワード・P.アドコック編、国立国会図書館訳 日本図書館協会資料保存委員会編集企画 2003.7

一橋大学社会科学古典資料センター所蔵資料から見る イギリス経済学の潮流について

木村雄一（埼玉大学教育学部）¹

企画展示やオープンキャンパスなどで、社会科学に関する古典資料の現物を展示する機会があると思います。オープンキャンパスで高校生がアダム・スミスの『国富論』、ホッブスの『リヴァイアサン』、ディドロとダランベールの『百科全書』の原書を見ると、大変感慨深いようです。

皆さんがイギリス経済学の古典を展示する企画を開催するとき、スミス、リカード、ミル、マルクス、ジェヴォンズ、マーシャルなどを教科書や辞典で調べると思います²。教科書はできるかぎり簡潔で明快に説明することを第一義として考えていますから、大変便利なものです。しかしその半面、教科書では経済学の古典が扱われるときその内容があまりにも簡潔に説明されるがために、誤解を招く可能性があります³。

現在でも根強い人気のあるアダム・スミスは、どの教科書を見ても、『国富論』（『諸国民の富』）を出版して「自由放任主義（レッセ・フェール）」を説いた経済学者として登場しています。しかし『国富論』を丹念に読めば、アダム・スミスが決して単なる自由放任主義者ではないことがわかります。「景気が悪くなると、アダム・スミスにお座敷がかかる。石油ショックの時がそうだったし、バブル崩壊の時もそうである。（中略）二百年ほど前に死んだスミスの亡霊を呼び出してどうするのだと、疑問に思われる向きもあるかも知れないが、スミスは手放しの自由放任主義者ではなく、自由競争に内在するルールを想定していた」⁴。

したがって本講義は、図書館員の方々を対象に、社会科学古典資料センターが所蔵しているイギリス経済学の古典を紹介していくことで（説明の便宜上、ドイツ、フランス、オーストリアの文献も含みます）、書誌を取ることや古典資料の保存・展示・学術企画を行うことに役立ててもらうことを目的とします⁵。

¹ 木村雄一，埼玉大学教育学部，社会科教育講座（経済学研究室），
ykimura@socia.edu.saitama-u.ac.jp

² 企画展示に関しては以下の文献をご参照ください。木戸浦豊和ほか「展示会からはじまる大学図書館の新たな可能性」（『大学図書館研究』80、2007），篠塚富士男「大学図書館における展示会活動」（同上），高橋菜奈子「図書館における公開展示事業と資料保存」（『大学の図書館』25-3、2006年），板橋久夫「『満州』関係資料の企画展示会と講演会の開催について」（『大学図書館研究』78、2006年）。

³ 根井雅弘「はじめに経済学の本当の面白さを伝えたい」根井雅弘編『経済学 88 物語』（新書館，1997年）8-10 ページ。

⁴ 水田洋『アダム・スミス』（講談社学術文庫，1997年）241 ページ。

⁵ 八木紀一郎『経済思想』（日本経済新聞社，1993年）の第1章～第6章の解説に基づいて講義します。

講義資料一覧（抜粋）

○ マン『東インド貿易論』初版 ロンドン：1621 年 [T.U.C./M92:T]

イギリス重商主義は通常 1688 年の名誉革命を境にして前期（絶対王政的重商主義）と後期（議会的重商主義）に分けられる。トーマス・マン（1571－1641）はその前期の重商主義を代表する人物である。彼は東インド会社の役員であり、会社の正貨輸出を批判する重金主義者に応じて本書を出版した。本書によって国富の増大は商品貿易を推進して国全体の貿易差額を黒字にすることで果たされるという「全般的貿易差額説」が確立した。

○ ウィリアム・ペティ『政治算術』第二版 ロンドン：1691 年 [T.U.C./P456:P]

ウィリアム・ペティ（1623－87）。イングランド・ハンプシャー州の織物労働者の家に生まれた。オックスフォード大学で医学を学び、学位を取得してから、同大学の解剖学教授に任命された。彼は社会科学における数量的方法を「政治算術」と呼んだ。本書は「計量経済学」の第一歩ともみなすことができる。

○ バーナード・マンデヴィル『蜂の寓話』第二版 ロンドン：1733 年 [Franklin:4279]

バーナード・マンデヴィル（1670－1733）。オランダ、ロテルダム生まれ。ライデン大学で医学と哲学を学んで、1691 年に医者となる。のちイギリスに渡り、開業医となる。本書は彼を著名にした作品。「個人の悪徳は熟練した政治家の巧妙な管理によって公益に変えられる」という逆説の主張で、当時のイギリス社会を風刺した。

○ カンティロン『商業試論』ロンドン：1755 年 [Menger/Fr.:1738]

リチャード・カンティロン（1680?－1734）はアイルランドからフランスへ渡った移民の出身で「ロー・システム」に深く関わって巨利を得た、いわゆる「ミシシッピアン」の一人である。『国富論』以前の最も体系的な経済学書と評されるこの書は、彼がロンドンの自邸で悲劇的な死を遂げる少し前の 1830 年代に英語で書かれ、本人自身が仏訳したものとされる。その後原稿は複雑な経路をたどり、死後 20 年以上経た 1756 年匿名でしかもすでに廃業して存在しないロンドンの「ガイルズ書店」の名で出版されている。著者も出版事情も謎めいていたこの書は、1881 年になって限界革命の主役の一人であるジェヴォンズによって歴史の闇の中から発掘されることになる。彼の生涯には不明な部分が多く生年も 1680～90 年の間としか分かっていない。『商業試論』は、重商主義や重農主義に影響を与えた。

○ ケネー『フィジオクラシー』初版：1767 年 [Menger/Fr.: 470]

「経済表」を考案したことで有名なフランソワ・ケネー（1694－1774 年）の諸論文を彼の弟子デュポン・ド・ヌムール（1739－1817）が編纂したもの。フランス革命前夜の 18 世紀半ばに「重農学派」の一人として活躍したが、「フィジオクラシー（重農主義）」という新語とともに彼の学説を広く普及する役割を果たした書。刊行地が北京とされている版は世界で数部しかない希覯本である。

- スチュアート『経済学原理』初版 ロンドン：1767年 [貴 B:172]

ジェームズ・スチュアート（1713－80）。モンテスキュー、ヒュームらから思想と理論の両面で影響を受けた。『経済学原理』によって経済学を独立した正規の学問として樹立させようとした。

- アダム・スミス『国富論』初版 ロンドン：1776年 [貴 E:140]
アダム・スミス『道徳感情論』初版 ロンドン：1759年 [Soda/ Ab:952]

アダム・スミス（1723－1792）の主著であり、イギリス古典派経済学の誕生を告げる第一級の古典である。本書の中で分業に基づく各人の自由な経済活動が結果として社会全体の富裕をもたらすと説き、イギリスの重商主義を批判した。「見えざる手」の言及は『道徳感情論』（1759年）にも見られる。近代的な市民社会の確立、富国徳社会の実現を意図したものである。なお、『国富論』初版の若干部では、スコットランドの販売用としてタイトルページの出版事項に“and W. Creech, at Edinburgh”が追加されている。古典センターではスミスの生前に出版された初版から第五版（1789）までの全ての版の『国富論』を所蔵している。

- セー『経済学概論』初版 パリ：1803年 [Menger/Fr.:1428]

需要と供給の必然的一致を説いて過剰生産恐慌を否定したセー法則で有名なジャン・バティスト・セー（1767－1823）の主著。彼は19世紀前半のフランスにおける自由主義経済学者の領袖であった。この書はフランスにおけるスミス経済学の普及に力を持ったばかりでなく、社会主義につながるサン・シモンにも影響を与えた。

- マルサス『人口論』初版 ロンドン：1798年 [貴 A:28]

トマス・ロバート・マルサス。人口の増殖能力は等比数列的であるが、食料はせいぜい等差数列的にしか増加させられず、土地の性質によって決められているとして、センセーショナルな反響を呼び、19世紀の大ベストセラーとなった『人口論』の初版。著者直筆の献呈辞が書かれている。

- リカード『政治経済学及び課税の原理』初版 ロンドン：1817年 [Franklin:4589]

デイヴィッド・リカード（1772－1823）。シティーの証券業者のもとに生れ、証券業で成功をおさめたが、スミスの『国富論』を読んで経済学に興味を持った。イギリス古典派経済学の完成者として古典派経済学の理論的最高峰とされている。

- J.S.ミル『経済学原理』初版 ロンドン：1848年 [貴 A:10]
J.S.ミル『自由論』初版 ロンドン：1859年 [Franklin:4357]

ジョン・スチュアート・ミル（1806－73）。経済学者・歴史家ジェームズの長子として生まれて、功利主義・古典派経済学の早期教育を受けた。ミルの『経済学原理』はマーシャルの『経済学原理』（1890年）が出版されるまで古典学派の標準的な教科書であった。古

典派経済学の集大成をして新古典派経済学への橋渡しをした書である。

- マルクス＝エンゲルス『共産党宣言』初版 ロンドン：1848年 [Franklin:6597](ベルリン：1894年)
- マルクス『資本論』第一巻初版 ハンブルク：1867年 [Menger /Mon.:2039]

＊『共産党宣言』

ドイツの経済学者・哲学者マルクスとドイツの社会学者エンゲルスが起草し、1848年にロンドンで公開された。ドイツ亡命者を中心とした「共産主義者同盟」の綱領。「ヨーロッパに妖怪が現われた。共産主義という妖怪が」という有名な言葉で始まり、階級闘争論を展開して、労働者階級の団結を呼びかけた。科学的社会主義の原理を簡潔に纏めており、世界各国の労働運動、革命運動の指針として大きな影響を与えた。

＊『資本論』

カール・マルクスの主著。自由競争が最盛期のイギリス資本主義を見据えながら、資本主義経済の原理と内容を解明しようとした古典的著作である。本書の第一巻初版は1000部のみ出版されたが、一橋大学はその3部（古典資料センター2部、附属図書館1部）を所蔵している。

- ジェヴォンズ『経済学の理論』第一版 ロンドン：1871年 [Menger/Eng.:762]

ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズ（1835－82）。ロンドンのユニヴァーシティ・カレッジで数学・化学を学び、シドニー造幣局で分析官として勤務。鉄道問題の関心から経済学を学び、帰国後大学に再入学して修士号を取得。論理学、科学方法論、経済学、労働問題など論じた。本書は、経済学を交換の学として、効用理論から演繹される交換の理論を論じた。

- メンガー『経済学原理』第一版 ウィーン：1871年 [Menger/Comp.:208]

現代オーストリア学派の祖カール・メンガーの不朽の名作。ワルラス、ジェヴォンズと並んで、「限界革命」のトリオの一人であるが、徹底した主観主義を説いた点が異なる。各ページの間に書き込み用の紙が挟まれている初版改訂用の特製本も所持している。

- ワルラス『純粋経済学要論』初版 ローザンヌ：1874年 [Franklin:2114]

レオン・ワルラス（1834－1910）。シュンペーターが「理論経済学のマグナカルタ」と表現したように現代経済学の重要な古典の一つである。すべての経済事象が相互依存的な性質を持っていることを数学的なモデルとして表現した。

- マーシャル『経済学原理』初版 ロンドン：1890年 [Menger /Eng.:939]

アルフレッド・マーシャル（1842－1924）。ジェヴォンズ以来のイギリス限界主義経済学とリカード以来のイギリス古典派の伝統を維持しようとした。

書籍の修理と保存の技術

岡本幸治

西洋古典資料を保存し利用し続けるために書籍の修理と保存の技術はとても大切である。表紙がはずれていたり、見返しが切れていたり、綴じがゆるんでいたり、ページがとれていたり、虫やカビによる損害でそのままでは利用できなかったり、利用すれば更に破損が進む恐れのあることがある。このような資料の傷みを回復して安全に利用できるようにしたり、保存容器に収納して保管環境を向上させ劣化の進行を抑制したりするのが書籍の修理と保存の技術である。

しかしながら西洋古典資料は、テキストの重要性は勿論のことだが、歴史的形態が大切な場合がある。折丁構成におけるページ差し替えの有無やブランクページの存在、刷りや版の違いが書誌的に重要な意味を持つ場合がある。出版形態や製本がテキストの社会的評価と結びついて意味を持つことがある。著者や所蔵者による献辞やメモ、線引き、蔵書票なども重要である。資料の持つ歴史的雰囲気を残すことも重要であろう。このような特殊な材料や形態を持った資料の修復に際しては専門的な知識や技術、経験が必要になる。製本の歴史・形態・構造・技法・材料などによく通じて、これらをよく理解した上で損傷を受けた資料に働きかけて出来るだけ少ない変更を伴いながら機能を回復するための方法を提案する必要がある。何が大切で残さなければならないのか、無くしていけないのは何なのかをはっきり理解する必要がある。資料の重要性を認識するためには、書誌の専門家や、書物の内容の研究者の、修復方法を立案するにあたっては保存科学や紙の研究者、生物学、皮革化学の専門家などの協力が必要な場合がある。可能な限り資料に変更を加えずに効果的な修理を行うのは易しいことではない。

書籍の修理と保存に必要な専門的知識は傷んだ資料の回復に適用されるばかりではない。資料が今後どのような傷み方をするのかを予測することが出来る。資料に引き起こされる傷みは形態や構造に起因するものであり、利用によってどのような負荷が発生するのかを指摘することができる。また材料の劣化も構造・機能による負荷を経て顕現化するのである。資料を利用することで、どのような負荷が発生し、構造と材料にどのような影響を与える可能性があるのか、現在発生している損傷や欠落・変異などが、そのままにしておけば進行して憂慮すべき段階へと進行するのかどうか、現在の利用頻度、利用方法で今後も安全に使い続けることが出来るのかなど、今後の保存方法を検討する上で修復に関する専門的知識と経験を役立てることができる。このようにして得られた情報を基にして、今後に必要な作業の量的把握が可能になり、傷み方による作業の緊急性、優先性を認識す

ることが出来て保存作業計画の立案に役立てることが出来る。更には、資料の閲覧、展示、移動、撮影、複写など様々な場面で有効な知識であり、このような専門知識を持って資料を管理する専門家の存在が要請される。書籍の修理と保存の技術は予防的保存の技術としても有効である。

以上の観点から、本講習会では本の形態および使用されている材料について情報を読み取るための手がかりとして、一橋大学社会科学古典資料センター修復工房で使用している「蔵書劣化調査票」を例にとりながら歴史的製本構造の特徴と保存上の意味について説明する。

1. 歴史的製本の技術

中世の製本工程、近世の製本工程、近代(19世紀以降)の製本工程

2. 製本構造について

折丁の準備、紙を折る、紙の目

本をとじる、中とじと平とじ、とじの支持体、

表紙をつける、とじつけ、リンプ装、くるみ製本

背のつくり、フレキシブル、タイト、ホロー

見返しを貼る、とじ見返し、巻き見返し、貼り見返し

3. 製本の動き

製本と保存、表紙開閉による負荷、背の柔軟性、製本構造と修復作業

4. 紙だけではない本の劣化

製本の材料は様ざま、本は読まれるもの、製本の構造によって傷み方が違う、
材料の劣化も使われ方で痛み方が違う

5. 一度には出来ない保存作業

いま出来ること、いましなければならないこと、これからすべきこと
どうやって決めるか、優先順位の設定

6. 調査票の重要性

製本の材料と構造の傷みを記録する

保存容器の中身が分かる、どんなに傷んでいるのか、これからなにをすべきなのか
傷みの全体が分かる、何がどれだけ傷んでいるのか(基礎データ、量的把握)

本の痛みがわかってくる、どんな傷み方をするのか(本の劣化把握ノウハウの蓄積)

これから傷みそうな本が分かる、データの分析が出来る、量的把握ができる

調査票を基にした体系的な保存作業

7. 古典資料センターにおける保存作業

- ・ 予防的保存
- ・ 調査票の活用
- ・ 保存作業

クリーニング／保革油／保存容器の製作／ページ修理と保存製本など

- ・メディア変換
- ・図書館蔵書の修理
- ・資料保存講習会
- ・虫害対策、災害対策

参考文献

『防ぐ技術・治す技術－紙資料保存マニュアル』 日本図書館協会 2005 年

『文化財のための保存科学入門』（京都造形芸術大学編 角川書店 2002 年）

『古書修復の愉しみ』（アニー・トレメル・ウィルコックス著 市川恵里訳
白水社 2004 年）

本の魅力は、中身を読む「読書」の面白さだけにあるのではなく、書物の「モノ」としての側面にもあります。とくに古典資料は、一冊一冊が「個性」をもち、なかなか渋い魅力をもっています。とはいえ、本文(テキスト)、製本、来歴(provenance)など、印刷・出版・造本に関わる「個性」を見抜くためには、書誌学の基本的な知識が必要です。

書誌学(bibliography)という用語は、書誌の編纂およびその活動を意味する列挙(分類)書誌学(enumerative bibliography)・体系書誌学(systematic bibliography)を指す場合と、「モノ」としての書物の研究あるいは文献伝達の研究(the science of the transmission of literary documents)を意味する分析書誌学(analytical bibliography)を指す場合とがあります。ここでは後者、つまり「原稿や植字工の植字癖の研究・分析を含む造本工程の研究を通して正しい本文を解明しようとする試み」(山下浩)としての書誌学を対象にしています。

書誌学の魅力の一つは、紙、活字、印刷面、造本など、「モノ」としての書物に残された具体的な物理的証拠に基づいて、その書物の本文、印刷・造本工程や出版にまつわる疑問を解明する「謎解き」の面白さにあります。といっても、書誌学の調査を行うためには、ある著作の同じ本あるいは版・刷・発行の違う本をできるだけ多く比較照合する必要があります。さらに著者や出版者の手紙・記録などの史料・資料を見つけ読み込んでいくことも必要です。購入を検討する場合や目録をとる場合など、図書館業務のなかで古典資料を扱う図書館員にとって、こうした「謎を解く」ためにそうそう時間や手間をかけてもいられません。そのため、書誌学の研究成果(書誌類・論文など)を上手に利用する必要があります。いわば、書誌学者を実際に謎を解く探偵とみなせば、図書館員は、実際の本と照合しながら書誌類・論文を読むことによって、推理小説を読むように謎解きのエッセンスを楽しめばよい、といえるかもしれません。(図書館員が実際の謎解きに取り組むことを否定しているわけではなく、積極的に謎解きに参加して貰いたいと思っています。)

たとえば、(社会科学の古典資料ではありませんが)後のページに載せたのはジョン・ミルトン(John Milton 1607-1674)による長編叙事詩『失樂園(樂園の喪失) *Paradise Lost*』(1667)の初期の刊本のタイトルページです。大きく分けると5種類、細かく分けると7種類のタイトルページが存在します。では本当の初版はどれでしょうか？どれが第二版や第三版などの後の版で、また海賊版も含まれているのでしょうか？

ここでは紙幅の関係で詳しい説明はできませんが、これら全てが「本当の初版」なのです。つまりこれら全てが実質的に同じ組版から印刷されたコピーです。でも一番目立つタイトルページは、印刷上の不具合の修正、売れ行きを心配した出版者による方針変更・工夫(著者名を隠す、出版年を新しくするなど。なお読者サービスとして「梗概」、正誤表の追加も行っている。)、出版者と書店との提携関係の変更などの理由で、差し替え・修正されたと推定されています。詳しくは R.G. Moyles. *The Text of Paradise Lost: A Study in Editorial Procedure*. (Univ. of Toronto Press, 1985) 参照。

この例からも判るように、実際に書誌学的に調べて「版」などを確定するには大変な知識と作業が必要で

すが、たとえば *Paradise Lost* が実際に手もとにあった場合、それが初版であるかどうか、初版でもどれに該当するのかわかることは、書誌学の研究成果を利用すれば比較的容易で楽しい作業となります。

今回は、(書誌学の研究成果を活用するために必要な)書誌学の入門的な知識と共に、書誌学の魅力・面白さを紹介したいと思います。

- 1 古典資料をオリジナルで所蔵することの重要性
- 2 書誌学の研究成果を上手に利用する
- 3 図書館員のための書誌学の基礎(Ⅰ):本の仕立て
- 4 図書館員のための書誌学の基礎(Ⅱ):記述書誌の読み方
- 5 図書館員のための書誌学の基礎(Ⅲ):印刷地の見分け方
- 6 書誌学調査のための科学機器
- 7 西洋古典資料とインターネット

といっても、講義時間の関係もあり、今回は主に「3 本の仕立て」と「4 記述書誌の読み方」を中心に取り上げる予定です。

「本の仕立て」(その本がどのような折り丁によって構成されているか)は、「モノ」としての書物を理解するうえでの出発点であり、「記述書誌の読み方」は、(理想本について記録した)記述書誌*と比較・照合することによって、その本が

- ①どんな本であるのか(著者、出版者、出版年など)
- ②どの版(edition)、刷(impression)、発行(issue)に属するのか(他のコピーとの関係)
- ③完全なコピーであるのか(本来あるはずの紙葉、図版などを欠いていないか)

といったことが判るので、図書館で古典資料を購入したり、利用者にサービスをする際に役に立つでしょう。

*図書館の目録が、実際に眼の前にある一冊の本の書誌的事項などを記録したものであるのに対し、記述書誌(descriptive bibliography)は、理想本(ideal copy:市販された刷・発行の範囲内で、出版者が出版を意図した形の本を歴史的に検討して再構築した本)の書誌的事項などについて記録しています。

業務のなかで古典資料を同定するために記述書誌を利用する場合には、その資料に関わる記入・書誌記述を参照するだけで済むことも多いでしょう。でも機会があったら、記述書誌の序文などの解説部分にも目を通すことをお勧めします。記述書誌を“読む”ことで、その著作の成り立ちや印刷・出版の経緯、著者と出版者との(交流や諍い・いざこざを含む)関係などを知ることができだけでなく、そのような経緯や関係が「モノ」としての書物に具体化されていること、その結果「モノ」としての書物を記録した記述書誌の記入・書誌記述にも反映されていることが理解できるでしょう。

以下の記述書誌の記載例は、前述の R.G.Moyles. *The Text of Paradise Lost: A Study in Editorial Procedure*.(Univ. of Toronto Press, 1985)による John Milton. *Paradise Lost*.初版の記載です。書誌によって、記述の内容・記載法は多少異なっていますが、基本的な事柄は共通していますから、他の記述書誌を読む場合にも応用することができます。

ジョン・ミルトン (John Milton) 『失樂園 (Paradise Lost)』 初版

First edition, 1667 (five title-pages)

- 1 Paradise lost. / A / POEM / Written in / TEN BOOKS / By JOHN MILTON. / Licensed and Entred according / to Order. / LONDON / Printed, and are to be sold by Peter Parker / under Creed Church neer Aldgate; And by / Robert Boulter at the Turks Head in Bishopsgate-street; / And Matthias Walker, under St. Dunstons Church / in Fleet-street, 1667. 4^o: π^1 A-Tt⁴ Vv²
- 2 Paradise lost. / A / POEM / IN / TEN BOOKS / The Author J.M. / Licensed and Entred according / to Order. / LONDON / Printed, and are to be sold by Peter Parker / under Creed Church neer Aldgate; And by / Robert Boulter at the Turks Head in Bishopsgate-street; / And Matthias Walker, under St. Dunstons Church / in Fleet-street, 1668. 4^o: A⁴ a⁴ A-Tt⁴ Vv²
- 3 Paradise lost. / A / POEM / IN / TEN BOOKS. / The Author / JOHN MILTON. / LONDON, / Printed by S. Simmons, and to be sold by S. Thomson at / the Bishops-Head in Duck-lane, H. Mortlack at the / White Hart in Westminster Hall, M. Walker under / St. Dunstons Church in Fleet-street, and R. Boulter at / the Turks-Head in Bishopsgate street, 1668.
- 4 Paradise lost. / A / POEM / IN / TEN BOOKS. / The Author / JOHN MILTON. / LONDON, / Printed by S. Simmons, and are to be sold by / T. Helder at the Angel in Little Brittain. / 1669.
- 5 Paradise lost. / A / POEM / IN / TEN BOOKS. / The Author / JOHN MILTON. / LONDON, / Printed by S. Simmons, and are to be sold by / T. Helder, at the Angel in Little Brittain, / 1669.

R.G. Moyles. *The Text of Paradise Lost: A Study in Editorial Procedure.*
(Toronto: University of Toronto Press, 1985)

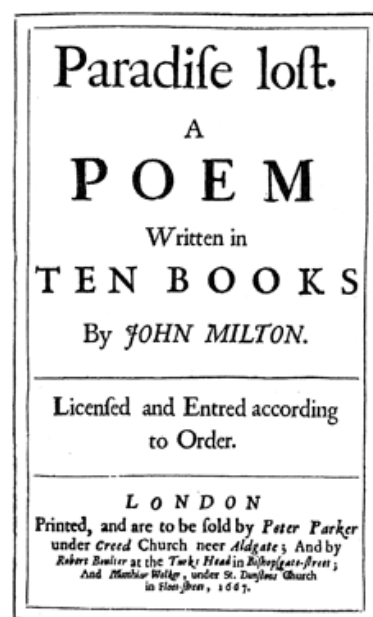


FIGURE 1 Title-page no. 1, 1667 Courtesy of Trinity College Library, Cambridge

タイトルの転記: タイトルページに記載されている事柄(文字、飾りなど)ができる限り忠実に転写(quasi-facsimile transcription)されていれば、つまり、書体の違い、大文字・小文字の区別、改行、飾りなどが判るように記録してあれば、実際の本同士を見比べなくても、書誌記述と比較照合することで、版などを同定することが可能です(どの本でも可能というわけではありません)。

判型: 現在の本の規格化された大きさによる判型とは違って、もともになる全紙の大きさも異なり、また製本時(再製本時)の化粧裁ちによっても本の大きさは違ってくるので、「折り」をもとにした判型で表現される。この本が四折り本(quarto 4^o: 全紙を2度折ってできた、4葉8頁からなる折り丁によって基本的に構成される)であることを示している。

校合式: この本の仕立て(折り丁の構成)を記録したもので、この本が、

1葉からなる折り記号のない折り丁(π^1) *注参照

4葉からなる折り記号「A」のついた折り丁(A⁴)

同様にして、4葉からなる折り記号「B」・・・「Z」、(二巡目の)「Aa」・・・「Tt」のついた各折り丁がつづき(B⁴C⁴・・・Z⁴Aa⁴・・・Tt⁴ → A-Tt⁴)

2葉からなる折り記号「Vv」のついた折り丁(Vv²)

によって構成されていることを示している。

*注 No.2以降では、この前付け部分が「(イタリックの)A⁴ a⁴」と異なっている。これは「梗概」や正誤表が加わったために前付け部分のページ数が増え、4葉からなる折り記号のない折り丁(A⁴)と4葉からなる折り記号「a」のついた折り丁(a⁴)に変更されたことを示している。(残りの部分は同じ。)

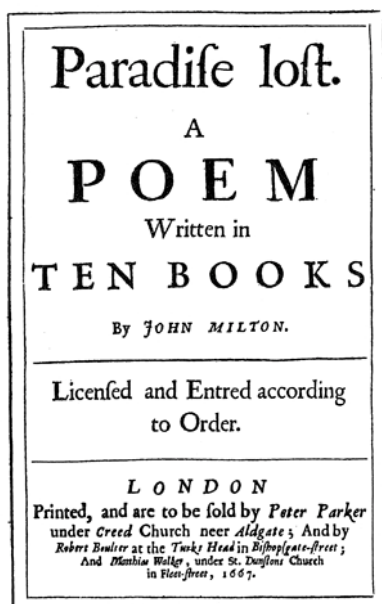


FIGURE 2 Variant of title-page no. 1, 1667 Courtesy of the British Library

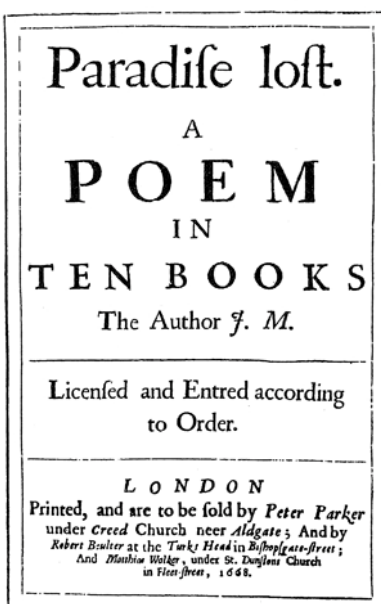


FIGURE 3 Title-page no. 2, 1668 Courtesy of the University of Illinois

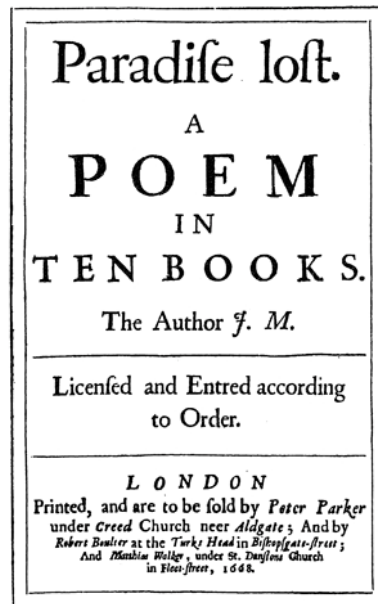


FIGURE 4 Variant of title-page no. 2, 1668 Courtesy of Trinity College Library, Cambridge

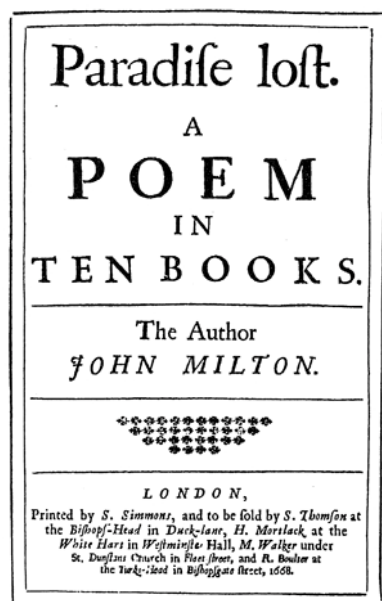


FIGURE 5 Title-page no. 3, 1668 Courtesy of the British Library

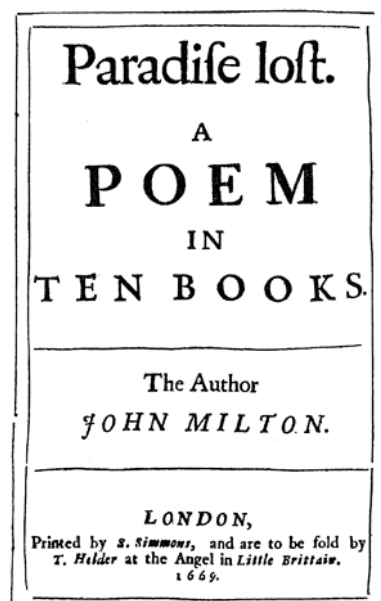


FIGURE 6 Title-page no. 4, 1669 Courtesy of the University of Alberta

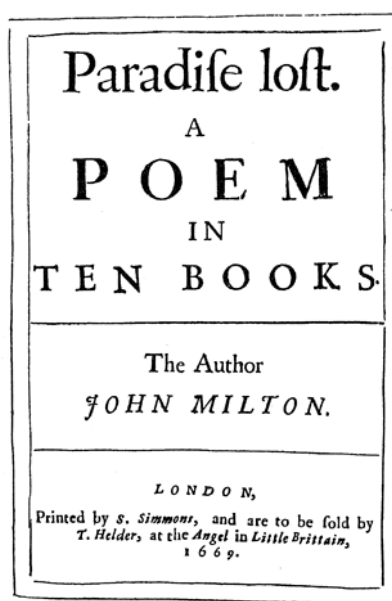


FIGURE 7 Title-page no. 5, 1669 Courtesy of the University of Alberta

[詳しい資料・参考文献リストは当日配布しますが、とりあえずの参考文献として高野彰『洋書の話』増補版(丸善 1995)を挙げておきます。]

参考: web サイト「The Biblio Kids!」(<http://www1.parkcity.ne.jp/bibkid/>)の「講習会テキスト」

「オーストリア哲学」の可能性とウィーン世紀末

嶋崎 隆

一 なぜオーストリアの哲学・思想なのか？

もともとカント、ヘーゲル、フォイエルバッハ、マルクスらのドイツ哲学を専門にしていた私が、なぜそれと異質な（とあとから明確に自覚した）オーストリア（その首都はウィーン）の哲学・思想・芸術などに関心を抱いたのか…。しかも、いわゆるドイツとオーストリアとは、同じドイツ語を母語とすることもあって、オーストリアの哲学・思想も広くドイツ哲学に含められる傾向が強い。とくに日本などでは、ドイツ的哲学と区別されたオーストリアの哲学・思想などは、一般に想定されていない。私の目的は、オーストリアの哲学・思想の独自性を追求することである。はたして、いわゆるドイツ哲学と区別されて、「オーストリア哲学」などというカテゴリーは成立するのか。私はそのさいに、広く、神聖ローマ帝国の皇帝を代々輩出してきたハプスブルク帝国の長い歴史的・文化的伝統とその結末としての世紀末現象が、社会的背景として大きな影響を与えたと考えている。ところで、私は研究の出発点として、以下の三つの文献を定めた。

- ・ウィリアム・ジョンストン『ウィーン精神』（井上修一訳）全二巻、みすず書房、一九八六年
- ・カール・E・ショースキー『世紀末ウィーン』（安井琢磨訳）岩波書店、一九八三年
- ・ジャニク・トゥールミン『ウィトゲンシュタインのウィーン』（藤村龍雄訳）TBSブリタニカ、一九九二年

たまたまウィーン大学で、コカイ・カーロイ氏の「文化史のトポスとしての一九〇〇年ウィーン」という講義を聴いたときに、氏が基本文献として上記の三冊を列挙した。そのときに、自分の選択が間違っていなかったと実感して、喜んだものである。

二 オーストリアの哲学・思想家群像

私がここで念頭に置く、オーストリアの哲学者・思想家というのは、日本で著名な者としては、ウィトゲンシュタイン、ウィーン学団（論理実証主義を唱えるシュリック、カルナップ、ノイラートら）、ブーバーであり、さらに「オーストリア的な哲学の始祖」（ペーター・カムピッツ）とみなされるフランツ・ブレンターノ、また日本でほとんど無名である哲学者として、ウィトゲンシュタインに影響を与えたマウトナー、またカトリックの

キルケゴールといわれたエーブナー、シュテールらが存在する。

さらにその周辺に、物理学者かつ哲学者のマッハ、現象学の創始者フッサール、ポーランド学派（トワルドフスキ）、精神分析のフロイト、科学哲学者のポパーらが配され、さらにその最周辺に、ハプスブルク帝国やウィーンの世紀末（ほぼ一八六〇年代から一九三〇年代まで）で活動した無数の芸術家（クリムト、シーレ、ココシュカ、オットー・ワグナー、ロース）、文学者（ムージル、シュニツラー、ホーフマンスタール、ツヴァイク）、音楽家（モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ブラームス、ヨハン・シュトラウス親子、マーラー、シェーンベルク）、社会学者（オーストリア社会主義者、カール・メンガー、ケルゼンら）、多くの自然科学者らが存在する。しかもそれら異分野の担い手が、喫茶店やサロンの文化によって相互に自由に交流し、学び合っていたのである。そして、アカデミズムの中心地としては、ウィーン大学が存在した。

ところで、オーストリアの哲学・思想の現代的重要性について、クルト・フィッシャー『ウィーンからの哲学』（独文）は、現代哲学の三つの動向を、①マルクス主義、②現象学、③分析哲学ないし科学哲学とすれば、②、③はハプスブルク帝国の領域内で発生し、①のマルクス主義・社会主義すらも、反マルクス・レーニン主義の立場で、オットー・バウアー、マックス・アドラーらによって担われていたという。またダメット『分析哲学の起源』（野本和幸・他訳、勁草書房、一九九八年）は、分析哲学を「英米系」の哲学と呼ぶべきではなく、むしろ「英墺系」の哲学と呼ぶべきだと提案した。

三 オーストリア哲学の特徴づけ

こうしたオーストリアの、というか、正確には、広くハプスブルク帝国の領土から生まれ出た哲学の特徴づけを、ルドルフ・ハラー、フィッシャー、カムピッツらの研究を継承して、私は現時点で、四点にわたって考えている。

- (1) 反形而上学的・反観念論的な傾向
- (2) 言語批判、言語分析など、言語（的コミュニケーション）への敏感な傾向
- (3) 哲学構築のさいの自然科学重視
- (4) 実証主義的ないし現象主義的態度

実は、これらの傾向はすべて、カントの超越論哲学、フィヒテ、ヘーゲルらのドイツ観念論にたいする反発から成立しているといつて過言ではない（歴史的事実を付加すると、この国では、カント主義やヘーゲル主義の大学教授は、辞職させられることがあったとい

う)。①はドイツ哲学による、哲学的思弁に依拠した、世界の（批判的）体系構築への批判、つまり形而上学への拒否を意味する。ここでは、ヘーゲルの弁証法などが反発されよう。彼らの提起する「物自体」「超越論的悟性概念」「絶対精神」「民族精神」などの大仰な「言語捏造物」への批判をおこなうのが②の課題である。たとえば、ブレンターノはドイツ観念論を総批判し、ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』は、「すべての哲学は言語批判である」と喝破した。カルナップは、最新の数学的論理学に依拠した鋭い言語分析で、デカルト、ヘーゲル、ハイデガーらを批判した。

ところで、二〇世紀にはいり、「言語論的転回」がスローガン化し、「二〇世紀は言語の世紀である」と語られた。まさにこの現代的重要性を担うのが、オーストリア哲学であった。だが、こうした反省は、日本哲学界では、ほとんど見られないのが現状である。

四 オーストリア哲学・思想と世紀末

だが、モダニズムともいうべき彼らの厳密な形而上学批判の背景に、実は世紀末の影が忍び寄っている。マウトナーは「聖なる沈黙」に至り、エーブナーは、世紀末文化を批判しつつ、二度も自殺を試みる。ウィトゲンシュタインも独我論的倫理を追求し、つねに自殺念慮に苦しむ。合理主義的なはずのシュリックも、ショーペンハウアー、ニーチェに共感し、教え子の凶弾に倒れる…。近代合理主義を標榜し、科学技術を重視する彼らの哲学の裏には、現代が引き寄せる何か暗いものが窺える。合理主義と科学技術は、けっして人間に幸福を約束しはしない。そしてその背景に、多民族・多言語・多宗教のハプスブルク帝国の特殊な歴史的事情が存在した。言語への批判や相対化という点では、多言語を許容し、言語令を施行せざるをえなかったというような事情が関わっていることであろう。同じドイツ語圏内において、かつて圧倒的に優位を誇ったハプスブルク帝国は、ドイツをライバルとしつつ、不動の静寂主義に立ち、徐々に没落していく。そこに、白髭の皇帝（フランツ・ヨーゼフ、在位一八四八―一九一六年）を我らが父と戴く中央の文化帝国…という「ハプスブルク神話」（クラウディオ・マグリス『オーストリア文学とハプスブルク神話』鈴木隆雄・他訳、風の薔薇、一九九〇年）が生まれ、滅びの美学が語られる。耽美主義（芸術至上主義）、快楽主義、エロスとタナトス、治療ニヒリズム、現実逃避、モダニズムと頹廢の混交などの世紀末文化の背景には、産業革命の勃興のなかでのブルジョアジーの弱さや、新しい旅立ちを保証するはずの自由主義の挫折があった。

だが、このウィーン世紀末はけっして過去のものではなく、われわれが生きる現代（ま

だ二〇世紀末だ！）の方向性と結末を圧縮して指示しており、その意味でおいに教訓的である。

フランス十七世紀における書物をめぐる状況

野呂 康

(成城大学非常勤講師)

1. はじめに、2. 出版：フランス近世出版統制の成立、3. 収蔵：図書館の興隆、4. 用途：論争文書とマザリナード、5. おわりに

1. はじめに

印刷術の発明以降、書籍は様々な形で私たちに魅了してきました。書籍は物質としても、またメディアとしても魅力的な媒体であったわけです。物質としての書籍は出版形態、収集、所蔵、装丁などの観点から、またメディアとしての書籍は思想内容、ジャンル、受容、用途などの観点から研究対象となることでしょう。

さてメディアと社会の間には相関関係がみられます。社会はその社会固有の条件に適合したメディアを備えています。例えば現代社会において電子媒体やインターネットは情報収集や知識の伝達、宣伝などの面でメディアとしての書籍を凌駕しつつある。しかし『ウィキペディア』の例を挙げるまでもなく、私たちは利便性ばかりを追求することはできず、インターネット情報の信憑性や陥穽に無関心ではられません。以下は紙とインクでできた印刷物が主要なメディアとして機能していた頃のお話（歴史）です。社会における書籍の位置と機能を把握するには、歴史の知識を駆使しつつ想像力を働かせる必要があります。

本講義では出版、収蔵、用途という3つの観点を手がかりに、フランス近世社会における書籍の位置と機能を分析することを目的とします。

2. 出版：フランス近世出版統制の成立

まずは書籍になるまでの話、すなわち出版について考えてみたいと思います。

印刷術の発明から百年を経た16世紀、メディアとしての書籍は依然重要視されていました。王権は他の国内勢力を抑えつつ、出版機構全体を統制下に置こうとします。これは宗教上の異端や危険思想を取り締まるためばかりではなく、出版にかかわる権威を確立することで、そこに付随した利益を享受することをも目論んだ政策でした。ここには王権と結託して特権を得ようとする書籍商・印刷業者や著作者などの利害も絡んできます。16世紀を通じて、王権は繰り返し出版にかかわる王令を発します。1566年のムーラン王令は、出版前の届出と免許状の取得を義務づけた画期的な王令です。こうして事前検閲制度の基礎が据えられたのです。

17世紀にも王権は度々出版への介入を試みます。とりわけ1629年のミショー法典は注目に値します。国の法律として大法官を頂点とする大法官府が出版に関する全般的な権限を持つことが確認されるのです。ここに出

版統制の制度としての完成をみることができます。

本講義では出版統制制度の構造を示しつつ、どのように出版の可否が決定され、その結果如何なる権力や不都合が生じたのかという点に関して、やや詳しくお話したいと考えています。

3. 収蔵：図書室の興隆

次いで書籍の所有にかかわる状況を見ることにします。

17世紀以前にも書籍は僧院・修道院などで収蔵されていました。ところが17世紀に入り、二つの変化がもたらされます。第一にこの時期、貴族が蔵書を自らの地位や威光を示す手段として考え始めました。王だけでなくリシュリユーやマザラン、セギエ、コルベールといった政治家が書籍収集に関心を示します。第二に、彼らは競うように個人図書室を建造させ、その管理人として学識ある文芸者を雇うようになります。こうして読書、所有と収集、整理と利用という考えが定着してゆくわけです。

貴族の嗜好と徳、時代の流行、そして学識ある管理者による独自の分類法の確立、以上のような諸条件がパリという空間内で整ったとき、現代の図書館の基礎が築かれました。現在のフランス国立図書館、その前身である現リシュリユー分館、マザリーヌ図書館などは、すべてこの時代の産物なのです。

4. 用途：論争とマザリナード

最後に、書籍の用途についてお話します。ここでは近年世界的な注目を集めているマザリナードとその用途を事例としてとり挙げることにします。

フランス史では大量のパンフレットが出回る時期が三つあります。第一は16世紀末カトリックとプロテスタントが対立した宗教戦争の時期、第二は17世紀半ばフロンドの乱の期間、第三はフランス革命期です。このうち内乱状態にあったフロンド期(1648年から1653年)の政治文書は、当時の宰相マザランの批判を中心としていることからマザリナードと総称されています。この語の定義を巡る複雑な問題には踏み込まないとして、マザリナードに分類される文書としては数枚のパンフレットから数百頁の大著まで、5000種以上あるといわれています。本講習会を主催されている一橋大学古典資料センターのフランクリン文庫にも四巻本のマザリナード文書が所蔵されていますし、東京大学には5つのコレクションで44巻、総計2800ほどの文書が所蔵されています。特に東大のコレクションはその規模もさることながら、世界的にも稀少な文書を含むという意味で大変貴重な蔵書であるといえます。ちなみにこれらのコレクションの一部はマイクロ化さえされておらず、また正式な書誌目録も作成されていません。ハーバード大学ホートン図書館所蔵のコレクションにも劣らない東大蔵書は電子目録化による検索システムが確立され、さらに文書そのものの電子化が実現された暁には、世界中の研究者の関心をひくことでしょう。

マザリナードは王権への批判文書ばかりで構成されているわけではありません。高等法院の文書、王令、マザラン擁護のテキスト、王権と対立していたコンデの宣伝や、フロンド期の出来事を戯れ歌や詩で表現したもの、論争文書などありとあらゆる形式のテキストが含まれています。もちろんその用途は一義的なものではありませんが、テキストが書かれたり出版された時の状況に応じて、王権やその他の勢力に対する批判や攻撃、秘められた論争が観察されるのは確かです。歴史家クリスチアン・ジュオーに倣って「言葉による行為＝働きかけ」と呼ぶことも可能でしょう。形式やジャンルに関心を持つ文学研究、論争やフロンドの乱などの歴史社会研究、書誌のあり方や収集の定義にかかわる書誌学研究など、多角的な視点や方法論が要請される学際的な文書媒体なのです。

ところで論争文書やマザリナードの多くは非合法出版されました。ここに王権による出版統制に対する拒否の姿勢を読み取ることは容易でしょう。またマザリナードは好事家による収集の対象となり、コレクションとしての価値と収集熱が煽られることになりました。後世の収集家による文書の受容と利用については今後の課題として、興味深いのはマザリナードがすでにフロンドの乱の時期から収蔵の対象とみなされていたという事実です。個々のパンフレットの批判機能とは別に、マザリナードとしての収蔵と用途は如何なるものだったのでしょうか。なぜ人は（個々の）マザリナードを発し、収集し、そして如何なる場面で用いたのか。フロンド期の論争文書やマザリナード研究は、フランス近世における出版統制や書籍収蔵の流行を理解する上で、決して無関係かつ特殊な事例というわけではないのです。

5. おわりに

本講義では出版構造、書籍の所有、用途の3点に限定して、フランス近世における書物状況の点描を試みました。書籍の状況全体を把握するためには、これらの互いに異なる視点どうしの接点を探ることが大切です。そのためにも文学、歴史学、文化社会学、書誌学、そして書籍の収集や保存、修復などに関する知見が必要不可欠であるといえます。フランス近世における書籍状況というのは確かに特殊専門的なテーマかもしれませんが、私たちが現在直面している出版、研究、書籍の状況と本当に関わり合っているのでしょうか。現代社会において、電子化やインターネットでは取って代わることの出来ない書籍の機能と魅力を再考する契機がこうした事例には秘められているように思われてならないのです。

モンテスキュー『法の本神』(1748) とその読者たち

山崎耕一

私に関心を持って勉強しておりますテーマは、一言で言えば「啓蒙思想とフランス革命」で、要するにフランス革命期を生きた人々は革命前にどのような書物を読み、どのようなことを考へて革命に臨んだのだろうか、革命前の思想形成と革命期の行動の間には何か関連があるのだろうか、あるとしたらどのような関連だろうか、という問題です。大変に大きなテーマで、とても一人で調べきれるものではありませんし、ましてや 1 時間半ほどの講義で話しきれるものではありませんが、今回はモンテスキューの『法の本神』に話題を限定することで、これまで調べたことの一端を紹介したいと思ひます。

『法の本神』(1748) は言うまでもなくモンテスキュー(1689-1755) の代表作です。ライフワークと言ってもいいかもしれません。モンテスキューの伝記を読みますと、彼の生涯全体がこの『法の本神』執筆をめざして進み、この執筆にエネルギーのすべてを注ぎ込んで生涯を終えたかのような印象を受けます。日本では、高校の教科書などで「モンテスキューは『法の本神』において近代的な三権分立を主張した」と紹介されておりますが、これではちょっと不十分であり、また誤解を引き起こす恐れもありますので、まず『法の本神』とはどのような書物かを簡単に紹介することから始めたいと思ひます。

『法の本神』の冒頭で、モンテスキューは 3 つの政体と、その本性(nature)および原理(principle)を区別します。3 つの政体とは共和政、君主政、専制です。「本性」とは、それぞれの政体のあり方で、共和政の本性は人民の集団もしくは人民の一部が主権を持つこと、君主政の本性はただ一人の君主が確立された法に従って統治すること、専制の本性は一人の君主が恣意的に統治することです。「原理」はそれぞれの政体を活動させる情念であって、共和政の原理は徳、君主政の原理は名誉、専制の原理は恐怖であるとモンテスキューは述べています。ただし「原理」は「あるべきもの」であって「現にあるもの」ではない、つまり「共和政の国の人々には必然的に徳がある」というのではなく、「共和政を維持するためには人々に徳がなければならぬ、共和政の下で人々に徳がなければ、共和政は変質ないし解体する」というのです。ついで、様々な社会的条件と各政体の関係が考察されます。たとえば、貿易の発達によって奢侈がもたらされるのは、共和政の下で徳を維持するため

には好ましくないが、名誉を傷つけるものではないから君主政においては悪影響はない、といった具合です。風土や土地の豊かさといった自然的条件も考察されます。たとえば、寒冷な地域では人々は必然的に勤勉になるので共和政に適するが、熱帯では神経が弛緩して怠惰になり、また自然の産物も豊かなので怠惰でも生活できる。このような土地では人々は強権で脅されねばともに働かないので専制に適する、といった具合です。ただし、こうした社会的・自然的な諸条件の影響は絶対的なものではありません。為政者は法律や制度によって、そうした諸条件の影響を助長したり、逆に緩和したりできるのです。その点に立法が持つ重要性があります。このようにしてモンテスキューは古今東西のさまざまな国や地域において、それぞれの社会的・自然的諸条件はそこに住む人々の情念・性格にどのように作用したか、そこにおいて立法はどのように影響を助長ないし緩和したか、その結果としてその土地での政体の本性と原理の対応関係は維持されたか、されなかったかを検討します。維持されればその国の政体は長続きし、安定しますし、維持されなければ政体は変質し、別の政体に移行します。モンテスキューは 1734 年に『ローマ盛衰原因論』を出版しており、この著作で古代ローマが初期の君主政から共和政を経て帝政（=専制）に至った後、蛮族に滅ぼされる歴史を描いていますが、その 14 年後の『法の精神』においては対象を世界史全体に広げるとともに、歴史はなぜ、どのように動くのかを説明する理論を示したのです。

ただ、一つおかしいと思われるかもしれません。古代ギリシアのプラトン以来、伝統的には政体は民主政・貴族政・君主政の 3 つに区分されるのが普通です。この区分なら、人民全体が参政権を持つのが民主政、人民の一部が政治に参加するのが貴族政、一人の君主のみが統治するのが君主政と、政治を行なう人の数だけですっきりと政体を区分できるのです。ところがモンテスキューは、従来は区別されていた民主政と貴族政を一まとめにして共和政に括ってしまい、代わりに従来は君主政の墮落形態とされていた専制を独立した政体として扱うことにしました。そのため、政体を区分するのに「どれだけの人が政治に参加するか」という数の原理に加えて「法に従うか、恣意的か」という別の原理を付け加えなければならなくなりました。ここでモンテスキューは明らかに無理をしているわけです。なぜこのような無理をしたのでしょうか。細かく論証していると話がややこしくなるので結論のみを記しますと、モンテスキューには上記のような「理論的・科学的」な関心に加えて、「イデオロギー的・時局論的」な側面があって、「自然的・社会的なあらゆる条件を加味して考えると、フランスには君主政が適する。フランスでは君主政が維持されな

けれどもならない。しかして君主政は法（基本法=憲法）に基づいて統治されねばならないが、もっとも重要なのは貴族など中間団体の存在である。国王と人民の間に中間団体が介在することで、君主政の法は維持される。しかるにルイ 13 世とリシュリューの頃から国王が絶対化し始め、中間団体が政治から排除されて、現在ではフランス君主政は忌むべき専制へ転化しつつある。だから中間団体の政治的役割を回復し、フランスを本来の君主政に立ち戻らせねばならない」という主張を『法の精神』は秘めているのです。そのために、この議論とは直接には関係ない民主政と貴族政は一括してしまい、代わりに君主政と専制の対比に光を当てるために両者を区別したのです。本来のあるべき君主制を論じる中での「君主と中間団体がそれぞれに権力を分有して、どの機関・団体も単独で恣意的な決定はなし得ないようにすべきだ」という主張が、多少形を変えて「三権分立論」として理解されることになったのですが、そこだけに光を当てたのではモンテスキューの本意を見失うと思います。

『法の精神』はモンテスキューが没する 1750 年代半ばから人々の間で評判になり、とりわけ裁判官や弁護士などの法律関係者の間で反響を呼びました。今回の講義では、南フランスの行政都市トゥルーズの人々（主に弁護士を取り上げますが）がどのように『法の精神』を評価したかを紹介したいと思います。第一の「理論的・科学的」な側面に注目して、モンテスキューによって哲学や（現在の言葉で言う）社会科学が一新され、政治や立法が厳密な科学の対象になったと評価する者もいれば、第二の「イデオロギー的・時局論的」な面に共感する者もいました。中には、モンテスキューの意義はわからないけれども流行の名前だからとりあえず自分の作品にも引用しておこう、という態度の者も見られます。そうした面も含めて、「思想が影響を及ぼす」とはどういうことかを考えてみたいと思います。また『法の精神』が評判になった結果、1770 年代後半から 1780 年代になりますとモンテスキューを主人公にした戯曲も 3 点ほど作られます。もし時間があったら、この戯曲についても紹介します。